オンラインカンファレンスの取組

～Zoom と Slack，Google ドライブを用いた場合の成果と課題～

五十嵐　健太（教育実践コース）

1　はじめに

新潟大学大学院教育実践学研究科では，毎年７月と３月に「にいがた教育フォーラム」を実施している。今回，新型コロナウイルス（COVID-19）の影響を受け，３月のにいがた教育フォーラムは中止となった。

しかし，国内外でテレワークやオンラインで活動を実施する企業，学校があった。そのため，私たちもオンラインで院生と教員をつなぎ，フォーラムを実施しようと考えた。M１現職院生の菊地さんと筆者を発起人とし，中止となったフォーラムの代わりとなるオンラインカンファレンス実施に向けて準備を進めた。筆者は，案内資料の作成と Zoom の設定を担った。

2　オンラインカンファレンスの実際

(1)　企画趣旨

オンラインカンファレンスの企画趣旨は，次の三つである。

①　学びの機会の確保
②　時間と場所の制約を排除
③　院生の ICT スキルの向上

まず，失われた学びの機会をオンラインでつなぐことで，それを保障しようとした。

また，オンラインでつなぐことで，時間と場所の制約を排除できると考えた。それぞれの家庭の事情や用務等で休日に家を空けることが難しいという声もあった。そのため，各自の都合にあった場所から参加することで，それらの事情をある程度考慮しながら参加することができる。また，遠方から大学に通う院生もいるため，そのための時間を他のことに充てることもできる。

さらに，2020 年度から GIGA スクール構想がスタートする。それに向けて，教師の ICT スキルの向上が求められる。しかし，インターネット上でそれらに関する知識を得ることはできても，実際に運用して体験する機会はそう多くない。そこで，参加しながら実際にアプリケーションを動かしてみる機会を設けようと考えた。

(2)　概要

オンラインカンファレンスは，2020 年３月 14 日に実施した。時間は 10 時から 15 時ごろまでである。使用したアプリケーションは，Zoom，Slack，Google ドライブの三つである。それぞれビデオ通話，グループ交流の内容記録，発表資料の保存という棲み分けを行った（図１参照）。

そして，飲食は自由とし，リラックスした雰囲気の中での自由な学び，発想を促すようにした。さらに，自宅から参加することのハードルを下げるため，子どもの声が入ることなどについて制限を設けなかった。これは，他の事例を参照したときに，「子どもの声が入ってしまう」という参加者側の悩みがあったからである。また，入退場自由とし，時間的な制約を設けず，参加者の都合に合わせて参加できるようにした。

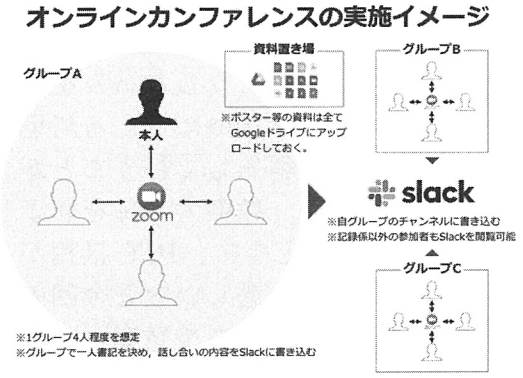

図１　三つのアプリの運用イメージ

(3)　当日までの流れ

Zoom では，事前にミーティング URL を生成した。この URL はホストが開始しなくても，２人以上が入室すれば会議が開始できるように設定した。そして，後述するブレイクアウトルームの設定を行った。また，今回参加できなかった他の院生，教員も振り返りができるよう，交流した内容を Slack に記述していくことにした。Slack 内には専用のチャンネルを用意し，Zoom で交流中でも交流の内容を記録できるようにした。参加者が発表で用いる資料は，事前に Google ドライブにアップロードし，発表時にそこからダウンロードしたり，直接閲覧したりする。また，事前に参加

したい院生，教員には案内（図２参照）を送付し，Google フォームから申し込んでもらった。その後，グループ分けを行った。

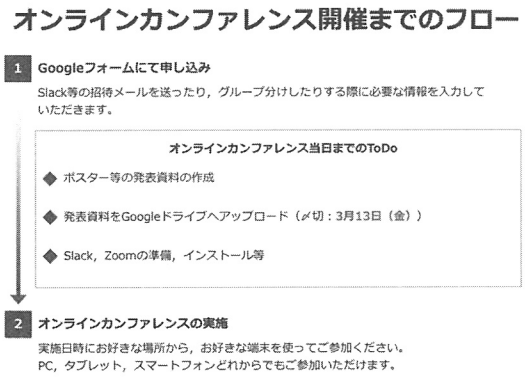

図２　当日までの流れの案内スライド

(4)　当日の運営

大まかな流れは，

①全体でのオープニング

主催院生・研究科長あいさつ，注意事項の説明など

②グループ交流

③全体でのクロージング

振り返り，感想のシェア

の三つである。

ア　Slack チャンネルの活用

Slack 内にある「教職大学院 2019」のワークスペースに，オンラインカンファレンス用のチャンネルを用意した。OC-General という全体連絡用のチャンネルと各グループ用のチャンネルを用意した。後述するブレイクアウトルームを活用すると，全体連絡が難しくなるため，OC-General のような全体連絡チャンネルを作成しておくことは非常に重要である。

イ　Zoom ブレイクアウトルームの活用

Zoom は２通りの使い方をした。一つ目の使用方法は，一つのミーティング URL に参加者全員に入ってもらう一般的な方法である。これは全体でのオープニングとクロージングで用いた。二つ目の使用方法は，ブレイクアウトルームを活用する方法である（図３参照）。ブレイクアウトルームとは，一つのミーティングルームをさらにいくつかのミーティングルームに分ける方法である。これは，グループ交流で用いた。これを活用することで，ミーティング URL を分けることなく，少人数でのグループ交流が可能となる。しかし，他のルームに行ってしまったメンバーとの交流の手段が途切れてしまうというデメリットがある。

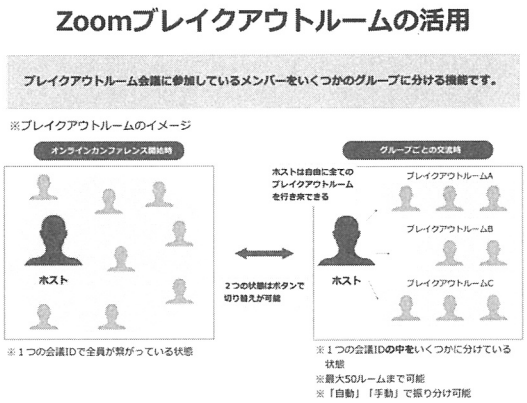

図３　ブレイクアウトルームの活用イメージ

３　オンラインカンファレンス実施後の感想と今後の展望

オンラインカンファレンス実施後に Google フォームでアンケートを行った。13 人から回答を得ることができ，全員がオンラインカンファレンスについて「大変満足」または「満足」と回答した。その理由として，「スムーズな交流（協議）ができた」「こうしたオンラインでも，多くの情報交換ができるとわかった」「今後，このような機会が増えてくると思うので，実際に体験することができてよかった」などがある。企画趣旨に対して，肯定的な回答を得ることができた。課題としては，オンラインカンファレンスの企画を立ち上げてから実施までの時間が短く，参加者の皆さんに十分な説明ができなかったことである。

今回の参加者のうち，私のみが修了生であった。来年度以降，同様の企画をする上で，参加者からは次のような声が上がった。

・オンラインでグループ協議をするほうが，オフラインよりも録画ができる，Slack に書き込めるなどメリットが多い気がする。

・いろいろなコミュニケーションの仕方があることを子どもたちにも理解させ、自分はどのようなコミュニケーションが得意なのかを自覚させることも大切なのではないか。

今後は，GIGA スクール構想も始まり，遠隔教育やタブレット端末を使った授業のニーズが益々高まることになる。教師には，ハードとソフトを実際に運用する能力が求められる。しかし，より大切なことは，これらのテクノロジーを用い，子どもたちにどのような資質・能力を養っていくかである。テクノロジーは，子どもたちの可能性を広げると考える。次の 10 年，20 年を見据え，それに向けた教育の在り方を模索し続けたい。